

## [課題演習報告]

# 高等学校における組織的な授業力向上の取組 —パフォーマンス課題と評価法の作成・活用を通して—

山 田 雅 人

Masato YAMADA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻スクールリーダーシップ開発コース  
教科教育リーダープログラム  
福岡県立折尾高等学校

(2024 年 1 月 10 日受理)

本研究は「パフォーマンス課題と評価法の作成・活用」が一体となった授業改善に組織的・計画的に取り組むことを通して、高等学校における教師の授業力向上に資することを目的とした。そこで1年次は、研究者が所属する英語科から「パフォーマンス課題と評価法の作成・活用」が一体となった授業実践に取り組み、そこから得た様々な事例や知見を職員研修や研究通信を通して組織全体に共有を図った。2年次に、年2回実施している公開授業週間を活用して「パフォーマンス課題と評価法の作成・活用」が一体となった授業を全教師の共通実践として推進し、実際に活用した学習教材等の共有・共用化を図った。

その結果、各単元や単元のまとまりの中で生徒の知識・技能を活用・発揮する「学びの舞台」を実現する授業が日常化する等、全教師の授業改善に大きな変化が見られた。また、学習評価についてもその意義を理解し意図的・計画的に評価を行う教師の姿が恒常化した。

**キーワード：**パフォーマンス課題，評価法，ルーブリック，授業改善，教科部会，働き方改革

## 1 主題設定の理由

### (1) 社会の要請から

様々な社会課題が存在し将来の予測が困難な時代において、持続可能な社会の創り手として、また一人一人のウェルビーイングの実現に向けて生徒の資質・能力の育成は急務である。

中央教育審議会答申（2021）「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の中で「私たち一人一人、そして社会全体が、答えのない問いにどう立ち向かうのかが問われている。目の前の事象から解決すべき課題を見だし、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論し、納得解を生み出すことなど、正に新学習指導要領で育成を目指す資質・能力が一層強く求められている」とある。

私たち教師は、今後の社会情勢の変化を粘り強く乗り越える生徒を育成するため、最新の教育事情に精通し、さらに専門的知識を身に付け、組織

的に授業改善を図ることが求められている。そこで、新しい時代に必要となる資質・能力の育成に向けて「学んだことを現実の状況で生きて働くものとして発揮できるかを評価する」パフォーマンス課題（西岡, 2021）と評価法が一体となった授業改善を組織的に進めていくことが必要だと考えた。

学習評価に関しては、指導に際して教師が生徒の学習状況等を把握し、自身の授業改善につなげる必要がある。一方、生徒には自らの学びを振り返り、学習調整を行ったりする等、次の学びにつなげる学習改善の側面があることも教師間で共通認識しておく必要がある。

### (2) 在籍校の実態から

在籍校である福岡県立折尾高等学校は、商業科と生活デザイン科を有する専門高校であり3学年15クラスの中規模校である。本年度は「学びあい高めあう」をあらゆる教育活動の中心に据え「社会に開かれた教育課程」を実現するためのカリキュラム・マネジメントを推進し、観点別評価を充

実させ、授業改善を図ることを重点目標の1つに掲げている。

令和4年度から新学習指導要領の本格的な実施に伴い、学校における働き方改革の視点を取り入れた組織的・計画的な授業改善の推進を図り、多様で多面的な評価法の活用を通して、教師同士の学びの蓄積・共有が必要であると考えた。

### (3) 1年次の研究の概要

1年次の研究では、生徒の資質・能力の育成を目指して英語科を中心にパフォーマンス課題の実践と評価法の作成・活用による「目標―指導―評価」が一体となった授業改善に取り組んだ。あわせて、研究通信である「折高AL通信」の発信と2度の校内研修を通して英語科の取組や学習評価の意義、生徒の振り返り等を全教師と共有した。

2年次の研究では、組織的な授業力向上を目指し、既存の取組である公開授業週間を活用した全教師による共通実践を計画した。

## 2 研究主題・副題の意味

### (1) 「組織的な授業力向上」とは

これからの時代に求められる資質・能力の育成に向けて、教科部会が中心となりパフォーマンス課題を意図的・計画的に仕組んだ単元構成を考え、その評価法の作成・活用を通して、指導と評価の一体化の実現に向けた授業改善を図ることである。西岡他（2009）がパフォーマンス課題や評価法の組織的な開発を通して教師同士が知識や経験を共有し、学びを深め合うことの意義を述べており、この組織的な取組は、働き方改革の視点も含み非常に価値があると考ええる。

### (2) 「パフォーマンス課題と評価法の作成・活用」とは

教科部会を中心とした単元開発を通して全教師が「さまざまな知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題」（西岡他，2022）であるパフォーマンス課題を各単元や単元・題材のまとまりの中で実践することである。また、その評価法の作成・活用を通して教師の指導改善及び生徒の学習改善につながる「目標―指導―評価」の一体化を図った授業を組織的に実現することを目指す。文部科学省（2022）「学習評価の在り方について」において「指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価を取り入れ、ペーパーテストの結果に留まらない、多面的な評価を行っていくことが必要である」と示されている。本

研究では、パフォーマンス課題と評価法が一体となった授業実践を組織的に推進する。

## 3 研究の目的

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に向けてパフォーマンス課題の実践と評価法の作成・活用による「目標―指導―評価」が一体となった授業展開を組織的に実現する。

## 4 研究の仮説

教科部会を中心に、全教師におけるパフォーマンス課題の実践と評価法の作成・活用による「目標―指導―評価」が一体となった授業に取り組むことで、組織的に授業力が向上するであろう。

## 5 仮説説明のための具体的方策

### (1) 英語科の実践

- ①令和4年生活デザイン科実態調査アンケート
- ②令和4年生活デザイン科授業の取組
- ③令和5年商業科実態調査アンケート
- ④令和5年商業科授業の取組
- ⑤結果と考察

### (2) 組織的な取組

- ①折高AL通信（研究通信）
- ②校内研修
- ③他教科における実践
- ④公開授業週間
- ⑤結果と考察

## 6 研究の実際

### (1) 英語科の実践

- ①令和4年生活デザイン科実態調査アンケート

表1 実態調査アンケート結果（生活デザイン科1年生）

	質問項目	平均
1	英語（英語の授業）は好きである。	2.1
2	英語を主体的（積極的）に学ぶことができている。	2.5
3	ループブック（英文を書いたり、発表したりする際の評価基準）等を活用して、英語の学習状況を振り返ったり、自分で学習内容を調整したりできている。	2.3
4	ループブック（英文を書いたり、発表したりする際の評価基準）を活用することは、英文を書いたり発表したりする際の基準となり効果的である。	2.7
5	ループブック（英文を書いたり、発表したりする際の評価基準）が示されると学習意欲が高まる。	2.7
6	パフォーマンス課題（テスト）があると、学習の見直しをもつことができ、学習意欲が高まる。	2.4
7	これから「パフォーマンス課題」に取り組む意欲がある。	2.6
8	4技能5領域の「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」の中で、最も苦手な領域はどれですか。1つだけチェックしてください。	

2022年7月、N=79 調査方法：質問紙法「横山・田中（2014）、今井・松沢（2015）を参考に作成し4件法にて実施」

7月の事前調査では8割以上の生徒が4技能5領域の中のアウトプット活動である「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」、「書くこと」に苦手意識があることがわかった。そこで教科書本文の読解後に複数の「核となるパフォーマンス課題」を経ることで学習意欲の低い生徒が自ら学ぶ姿勢に変容した実践研究(今井・松沢, 2015)があるように、まずは生徒が取り組みたくなるようなパフォーマンス課題を設定する必要があると考えた。

Swain (1985) はアウトプット仮説を提唱しており「アウトプットは言語資源を有意義に活用する機会を与える(Swain, 1985, p. 248, 研究者による翻訳)」と述べている。また「学習者は、受容知識を生産的な活用に転換するよう促される必要がある(Newton & Nation, 2021, p. 140, 研究者による翻訳)」という主張もあり、教師は、話したり、書いたりするアウトプット活動の場面を意図的につくらなければならない。あわせて、単元導入時に、ルーブリックを生かして評価基準を示すことで少しでも学習活動における生徒の心理的な負担を軽減し、学習への見通しをもち、学びに向かう姿勢を喚起できるよう試みた。

## ②令和4年生活デザイン科授業の取組

2学期に第1学年生活デザイン科2クラス(78名)を対象に、単元のまとめの学習として本授業担当教師とパフォーマンス課題「学校にあれば便利だと思うピクトグラムを考えて、クラスで提案しよう」と評価法が一体となった授業を行った。パフォーマンス課題とルーブリックの作成にあたってはまず教科部会を中心に「逆向き設計」(Wiggins & McTighe, 2005; 西岡, 2009)の考え方に基づき単元構成を考えた。そして西岡他(2009)による、よいパフォーマンス課題の条件「真正性」「妥当性」「関連性」「レディネス」の4つの視点を教師間で共有し意見交流を図った。複数回の教科部会を経て、パフォーマンス課題を決定しそれに合わせたルーブリックも同時に作成した。

パフォーマンス課題を実践した教師からは「生徒たちは本文で学んだ表現やピクトグラムを作る際に大切なことを活用し、ルーブリックを生かして、授業者が期待していた原稿よりも非常にしつかりとしたものを作っていた」と実践の効果を感じる意見があった。一方で「ルーブリックは生徒と内容を共有できるもの、つまり生徒の言葉で記さないとわかりにくく、シンプルにすることで、継続的に誰でも活用できるという実用性が生まれる」という意見もあった。金子(2019)は、ルーブリックを綿密に作成することは時間がかかるか

もしれないが、その手間をかけることで、評価に迷うことが少なくなり、一貫した評価と信頼性の高い評価を行うことができると述べている。妥当性・信頼性のあるルーブリックを作成する教師間の営みの重要性和その活用に係る実用性の視点を再認識することができた。

引き続き、第1学年生活デザイン科2クラス(78名)を対象に、単元のまとめの学習として本授業担当教師とパフォーマンス課題“Let's introduce your favorite World Heritage Site in Japan to foreigners.”と評価法が一体となった授業を行った。パフォーマンス課題とルーブリックの作成においては、前回同様に西岡他(2009)による、よいパフォーマンス課題の条件を基に教科部会で検討を重ねた。発表用のルーブリックに関しては、教科部会での検証の際「もっとデリバリー部分を大切にしたい」との提案があり、その内容を反映させたルーブリックを作成した。また、英作文用のルーブリックに関しても「生徒の実態を十分に踏まえた上で、評価基準が教師にも生徒にもさらにわかりやすく焦点化したものがよい」との提案を受け、英作文作成の条件としてチェックリストの形式で英作文プリントに記載した。

パフォーマンス課題を実践した教師からは「ルーブリックを活用することで、生徒に対して重点事項の意識付けであったり、授業中の説明等も聞き逃さないようにする姿勢を促したりと『学びへの自覚』の醸成につながった」や「改めて組織的に取り組むことが大切だと感じた。そしてパフォーマンス課題等取組の方向性が同じだからこそ、生徒にとっても効果を発揮するといえる」等の意見があり、パフォーマンス課題と評価法の作成・活用が一体となった授業実践は非常に意義のあるものになった。

## ③令和5年商業科実態調査アンケート

表2 実態調査アンケート結果(商業科2年生)

	質問項目	平均
1	英語(英語の授業)は好きである。	2.2
2	英語を主体的(積極的)に学ぶことができている。	2.6
3	ルーブリック(英文を書いたり、発表したりする際の評価基準)等を活用して、英語の学習状況を振り返ったり、自分で学習内容を調整したりできている。	2.6
4	ルーブリック(英文を書いたり、発表したりする際の評価基準)を活用することは、英文を書いたり発表したりする際の基準となり効果的である。	2.9
5	ルーブリック(英文を書いたり、発表したりする際の評価基準)が示されると学習意欲が高まる。	2.7
6	パフォーマンス課題があると、学習の見通しをもつことができ、学習意欲が高まる。	2.7
7	これから「パフォーマンス課題」に取り組む意欲がある。	2.8
8	4技能5領域の「聞くこと」「読むこと」「話すこと(やり取り)」「話すこと(発表)」「書くこと」の中で、最も苦手な領域はどれですか。1つだけチェックしてください。	

2023年5月、N=118 調査方法：質問紙法「横山・田中(2014)、今井・松沢(2015)を参考に作成し4件法にて実施」



本学年は、新学習指導要領対象学年であり1年次より全クラスでパフォーマンス課題と評価法が一体となった授業に取り組んでいる。昨年度は研究者が生活デザイン科2クラスを研究の対象とし本年度は商業科3クラスを研究の対象とした。

4月の事前調査では4技能5領域の中で「話すこと」に関して、全体の約7割の生徒が苦手意識をもっていることがわかった。また、生徒の記述からも英語学習に対する意欲やループリック等の評価法を生かした学習改善に課題があると考えた。そのため実際の取組では「フィードバックは学習者が“active agent”となり、自身のパフォーマンスを改善するとともに指導法改善にも活用される(Newton & Nation, 2021, p. 241-242, 研究者による翻訳)」とあるように、パフォーマンス課題後にループリックを生かした生徒の学びの改善を促すフィードバックに意識的に取り組んだ。

#### ④令和5年商業科授業の取組

1学期に第2学年商業科3クラス(118名)を対象に、単元のまとめの学習として本授業担当教師とパフォーマンス課題“Let's introduce a traditional Japanese dance performance or festival to Coutts sensei.”と評価法が一体となった授業に取り組んだ。

まず教科部会(令和5年度は月2回程度実施・研究者含む)を通して、授業計画(英語コミュニケーションⅡは2単位)をさらに工夫し、パフォーマンス課題を年間計画に程よく位置付けることが必要であるという認識を共有した。また「話すこと[発表]」に係るループリックの見直しを行った。これまで活用してきた全てのループリックC項目を否定的表現から肯定的表現にし、プラス方向のループリックに変えた。また、各グループごとに全体で発表した後、教育的観点からその発

表動画をGoogleグループ内で作成したGoogleスライドに挿入させた。次に事前に共有しているループリックを基に各グループ内で発表の振り返りを促した。最後に個人の振り返りに関しては、Googleスライドにコメントさせ、担当教師・研究者と同じグループ内の生徒のみが、可視化できるようにした。生徒の発表動画と各自の振り返りに担当教師と研究者がループリックに基づいたフィードバックを与え、生徒の学習改善を促した。

資料1 発表場面

資料2 グループでの振り返り



2学期に単元のまとめの学習として本授業担当教師とパフォーマンス課題「絶滅危惧種を保護するためにできることを考えて提案しよう」と評価法が一体となった授業に取り組んだ。1学期同様に発表動画をGoogleスライドに挿入させ、次に事前に共有しているループリックを基に各グループ内で発表の振り返りをさせた。パフォーマンス課題を実施した本単元は、同時期に行われていた「論理国語」の授業内容とも関連があり英語科・国語科ともに横断的に取り組むことができた。

パフォーマンス課題と評価法が一体となった授業を通して、英語科教師にインタビューを実施したところ「これが足りないから次にこれを満たすとAになるなどの基準を、生徒は事前に知るからこそ発表の練習をするようになる(自己調整)」と述べており、ループリックを活用した指導が生徒により影響をもたらしていると考えられる。英語科主

表3 生徒アンケート結果(対応のあるt検定)

		生活デザイン科 (n=77)			商業科 (n=115)		
		時期		t(76)	時期		t(114)
		R4 10月	R4 12月		R5 6月	R5 10月	
1	パフォーマンス課題に意欲的に取り組むことができた。	M 3.35	3.25	1.34 n.s.	3.43	3.44	0.28 n.s.
		SD 0.53	0.69		0.61	0.60	
2	パフォーマンス課題が事前に示されることで、見通しをもって取り組むことができた。	M 3.22	3.22	0.00 n.s.	3.11	3.35	3.85 **
		SD 0.58	0.72		0.62	0.56	
3	パフォーマンス課題があると、学習の見通しをもつことができ、学習意欲が高まった。	M 3.05	3.05	0.00 n.s.	2.83	3.08	3.17 **
		SD 0.67	0.78		0.77	0.64	
4	ループリック(英文を書いたり、発表したりする際の評価基準)があることで、学習意欲が高まった。	M 3.12	3.10	0.17 n.s.	3.08	3.28	2.81 **
		SD 0.63	0.72		0.73	0.60	
5	ループリック(英文を書いたり、発表したりする際の評価基準)があることで、自分の目標を明確にすることができた。	M 3.09	3.05	0.57 n.s.	3.14	3.40	3.92 **
		SD 0.67	0.69		0.69	0.53	
6	ループリック(英文を書いたり、発表したりする際の評価基準)を活用することは、英文を書いたり発表したりする際の基準となり効果的であった。	M 3.00	3.05	0.60 n.s.	3.15	3.25	1.59 n.s.
		SD 0.69	0.69		0.64	0.62	
7	ループリック等を活用して、英語の学習状況(自分の理解度など)を振り返ったり、自分で学習内容を調整したりすることができた。	M 2.84	3.13	3.04 **	3.13	3.12	0.11 n.s.
		SD 0.74	0.68		0.69	0.69	
8	ループリック(英文を書いたり、発表したりする際の評価基準)を活用して自分のパフォーマンスを振り返り、改善に生かすことができた。	M 2.87	3.06	2.30 *	3.18	3.32	2.03 *
		SD 0.71	0.69		0.62	0.63	
9	「文法指導や本文読解(本文を読むだけの学習)」だけで終わる学習と「本文読解のあとにパフォーマンス課題に取り組む」学習がある場合とでは、自身の英語学習の仕方に変化があった。	M 2.88	3.04	1.59 n.s.	2.85	3.21	4.39 **
		SD 0.76	0.75		0.78	0.74	
10	英語学習(英語の授業)に対して以前より前向き(積極的)に取り組めるようになった。	M 2.73	2.69	0.55 n.s.	2.91	3.03	1.40 n.s.
		SD 0.79	0.77		0.77	0.75	

\*\*p<.01, \*p<.05

任は「パフォーマンス課題と評価法が一体となった授業を通して生徒の見えにくい学力（テストでは測りにくい学力）を多面的に測ることができる」と述べており英語科では昨年度からの取組が恒常化していると考ええる。

### ⑤結果と考察

まず令和4年10月と令和4年12月の2回の生徒アンケート結果（生活デザイン科1年生）について対応のある  $t$  検定を行った（表3）。質問1～6、質問9と10に関しては、有意な差は見られなかった。質問7と8に関しては、有意な差が見られ、それぞれ令和4年10月より令和4年12月の方が得点が高かった。令和4年度は、2学期に2回のパフォーマンス課題と評価法の作成・活用を通じた授業に担当教師と研究者で取り組んだが、短期的な取組では生徒の大きな変容は見られなかった。一方で「採点がかえってきからなぜここがダメなのかが、ループリックを見ると分かり、さらに改善しようと意欲がわいた。次のパフォーマンスではここをもっと改善しようという考えが思い浮かんだ」という生徒の振り返りが見られた。この記述からループリックを活用して自身の発表を振り返ることで次の学びにつなげたり学習内容を自ら調整したりしていることが明らかになった。

また、令和5年6月と令和5年10月の2回の生徒アンケート結果（商業科2年生）について対応のある  $t$  検定を行った（表3）。質問1と6・7と10に関しては、有意な差は見られなかった。質問2～5と質問8と9に関しては、有意な差が見られ、令和5年6月より令和5年10月の方が得点が高かった。2年次対象クラスは1年次より同じ取組を継続しており、長期的な実践により生徒の変容が見られたと考えられる。パフォーマンス課題やループリックが各単元や単元のまとまりの中で学習の明確なゴールとして示されることで、生徒の学習意欲が高まり、設定した自身の目標を達成しようとしていることが明らかになった。

「ここができていたが、一方、できていなかったところも明確にわかり改善に向けて次につなげることができた。学び直すという点でうまく活用できた」というループリックを生かした生徒の振り返りから、学習改善も図っていることが確認できる。他にも「自分の学習に見通しをもつことができており、授業内容の本質の理解度が全く違う」「社会にでてプレゼンすることを意識するようになった。英語で自分の考えを伝えることが上達したと思う」等の振り返りもあり、パフォーマンス課題と評価法が一体となった授業実践が生徒

の深い学びにつながっていると考えられる。

質問1に関しては、他の項目に比べて、もともと得点が高かったことから1年次、2年次ともにパフォーマンス課題に意欲的に取り組んでいたことがうかがえる。質問10に関しては、英語科教師より「今後パフォーマンス課題と評価を位置付けた3年間の系統だったカリキュラムを作成・共有する必要がある。実態に沿った指導と3年間の積み重ねにより本当の英語力が身に付く」との意見があった。改めて新しい時代に即した生徒の資質・能力の育成に向けて、絶えず授業改善に取り組む、主体的に英語を学ぶ生徒の育成を図らなければならない。

### (2) 組織的な取組

#### ①折高 AL 通信（研究通信）

図1 折高 AL 通信（令和5年4月）



定期的に発行している折高 AL 通信（研究通信）を活用して、本研究の中心となる「パフォーマンス課題と評価法の作成・活用」が一体となった授業改善の意義や生徒・教師アンケート結果、公開授業週間の振り返り等について、計6回にわたり全教師間で情報共有・実践共有を図った。図1は令和5年4月に発行した折高 AL 通信である。令和5年度は年2回の公開授業週間を活用して、全教師の共通実践として「パフォーマンス課題と評価法の作成・活用」に取り組むため、折高 AL 通信を活用して指導観の共有（パフォーマンス課題の意義や考え方、つくり方等をまとめたもの）を図った際の資料である。あわせて、学校 HP にも掲載することで学校の取組を広く発信した。

## ②校内研修

表 4 職員研修一覧

日程	対象	内容
① R4年 7月 29日	英語科・新たな学び	学習評価に係る研修会 Part 1
② R4年 12月 21日	全教師	学習評価に係る研修会 Part 2
③ R5年 4月 5日	転任者	パフォーマンス課題と評価法の作成・活用
④ R5年 4月 26日	教科主任	公開授業週間に向けて
⑤ R5年 5月 21日	全教師	学習評価と公開授業週間に向けて
⑥ R5年 7月 21日	全教師	公開授業週間等の振り返り・教科等横断的な視点のあるパフォーマンス課題について
⑦ R5年 11月 29日	全教師	公開授業週間等の振り返り

第1回職員研修では妥当性・信頼性のある評価について学習したり、パフォーマンス課題の目的やルーブリックの活用法等を具体例に基づいて意見交流を図ったりした。また、2学期に向けて英語科の取組の方向性を確認した。

第2回職員研修では、令和5年度から全教師で組織的に取り組んでいくために英語科の実践内容を中心に、さらに具体化した提案を行った。研修のまとめとして、学校長から生徒の資質・能力のさらなる向上に向けて、「パフォーマンス課題と評価法の作成・活用」が一体となった授業改善を組織的に推進していく必要性が示された。

第5回職員研修では、6月の公開授業週間にて昨年度英語科で先行実施していた「パフォーマンス課題と評価法が一体となった授業」を全教科・科目で実践するために、教師一人一人の当事者意識の醸成を図った。松下（2007）が、パフォーマンス評価は「見えやすい学力」だけでなく「見えにくい学力」も可視化することが可能であると述べている。生徒の資質・能力を育成するためにも、改めて学びの節目に取り組むパフォーマンス課題と評価法が一体となった授業に組織的・計画的に取り組む意義を全教師で共有した。

令和5年度は、例年と異なり既存の取組である公開授業週間を6月と10月の年2回（各2週間）に設定し、全教師の共通実践として組織的・計画的に取り組んだ。第6回・第7回の職員研修では、公開授業週間中の複数の実践内容や授業改善に係るアンケート結果等を共有した。以下は研修後の振り返りの一部である。

- ・「目標・指導・評価が一体となった授業改善」については日頃の「普通の・あたりまえの」こととして定着してきた気がする。
- ・いろいろな情報交換を通してお互いの指導力が向上するような組織づくりの大切さを研修会で再認識できた。
- ・「学習評価はコミュニケーションツール」という考え方にハッとさせられた。1日の大半を占める授業時間や評価は、人間関係・信頼関係を築くために重要である。改めて授業を大切にしたい。

## ③他教科における実践

公開授業週間以外にも、複数の教科・科目で、パフォーマンス課題と評価法が一体となった授業を実践している姿が見られた。

数学科では、パフォーマンス課題「4種類のくじの賞金の確率や期待値を考えて挑戦するくじを選び、理由を説明しよう」と評価法が一体となった授業が実践された。意欲的にパフォーマンス課題を実践しているA教諭にインタビューしたところ「数学の有用性を体験させることで『数学を活用しよう』という興味喚起が期待でき学習意欲につながる。以前は受験で点数を取らせることを目的に授業を組み立てていたが、今は社会生活の中で『どう生かすことができるか』を念頭に、教師として『どう伝えるか』『どう体験させるか』等を考えて授業を組み立てている」とのことであった。

評価に関しては「以前はなんとなく漠然と評価していたが、ルーブリック導入後は『何を評価するのか』を意識するようになった。その結果『何を教えるのか』『何が出来るようにしたいのか』を考えるようになって授業を組み立てるようになった」とのことであった。

国語科では、パフォーマンス課題「生物多様性を大切にするために、私たちにできることを考えて発表しよう」と評価法が一体となった授業が実践された。A教諭同様にパフォーマンス課題に積極的に取り組んでいるB教諭にインタビューしたところ「研修等を通してパフォーマンス課題に取り組み始め、ゴールをもたせて授業をする大切さや、パフォーマンス課題を通して生徒の本当の思考力や判断力、表現力が身に付いていると感じる。効果的なパフォーマンス課題の実現は永続的理解を導くものである。また、協働的な学びにもよい影響があり、授業における読解が以前より深まった」とのことであった。

評価に関しては「ルーブリックを作成することで、単元等全体を見通して授業を組み立てることができる。生徒が最後にどんな姿になってほしいのかを考えてルーブリックを作成しており、授業でやるべきことが明確になった。ルーブリックの活用を通して生徒・教師ともに目標が明確化されるので生徒にとっても効果的であると感じる。また、生徒の学習改善にもつながりやすくなるので、大変意義があると思う」とのことであった。

以上のことからパフォーマンス課題と評価法が一体となった授業実践が教師の授業改善に大きく寄与し、生徒の学びにもよい影響を与えていることがわかる。



## ④公開授業週間

本年度は公開授業週間を年2回各2週間に設定した。石井（2023）によれば、カリキュラム・マネジメントは目標・指導・評価の一貫性を問い、目標実現に向けて学校や教師集団がチームとして、教科の枠も超えて、協働的・組織的に実践と改善に取り組むことを提起するものであり、授業の質は、教師同士が学び合いともに挑戦し続けるような同僚性と組織文化があるかどうか大きく規定されると述べている。そこで公開授業週間では働き方改革の視点を取り入れた次の3点、①共通実践（目的共有化）、②可視化された授業実践一覧表、③学習教材等の共有・共用化を具現化できるように取り組んだ。

まず「パフォーマンス課題と評価法が一体となった授業」を全教師（非常勤除く）の共通実践として掲げ、組織的・計画的に取り組んだ。次に授業者が実践を通して育成すべき資質・能力を明確化したり、参観者が見通しをもって授業に参観したりできるよう全教師の授業実践（パフォーマンス課題と評価法）を一覧にし、持続可能な授業改善となるよう工夫をした。また、ループリックや学習教材等をすべて共有サーバーに保管・共用化することで、教科・科目を超えた学びの促進と教師同士の知見の共有を図った。

2回の公開授業週間を通して、昨年度英語科から取り組み始めた「パフォーマンス課題と評価法が一体となった授業」が、先生方の日頃の授業の中に浸透していると考えられる。また、授業を参観し合うことから得られる学びも促進しており大変意義のある取組になったと考えられる。「今回の取組を通して生徒の意識が大きく変わった」という教師の振り返りからも、それぞれの授業実践が生徒たちの深い学びにつながっているという確かな手応えが読み取れる。

## ⑤結果と考察

教師アンケートの因子構造を明らかにするため

表5 教師アンケート因子分析結果

項目	因子負荷量			共通性
	I	II	III	
I 評価法の作成・活用 ( $\alpha=0.92$ )				
5 ループリック等（学習到達度を示す評価基準等）を活用した評価法を取り入れている。	<b>0.94</b>	-0.16	-0.06	0.78
6 ループリック等の活用を通して授業改善に取り組んでいる。	<b>0.74</b>	-0.04	0.10	0.54
8 ループリック等（学習到達度を示す評価基準等）を活用して、生徒のパフォーマンス課題等を意図的に評価している。	<b>0.65</b>	0.32	-0.05	0.71
II 授業改善の取組 ( $\alpha=0.68$ )				
1 日頃から、ALの視点をもって授業改善に取り組んでいる。	0.04	<b>0.79</b>	0.02	0.65
7 ループリック等を活用したり、パフォーマンス課題を取り入れたりすることで、生徒が主体的に学ぶようになると思う。	-0.01	<b>0.59</b>	0.10	0.36
4 各単元や単元・題材のまとまりごとにパフォーマンス課題を実施している。	0.07	<b>0.56</b>	-0.05	0.36
10 教科等横断的な視点をもって授業に取り組んでいる（取組もうとしている）。	-0.29	<b>0.42</b>	-0.07	0.16
III 教科部会の取組 ( $\alpha=0.98$ )				
2 教科（科目）内で、評価方法や評価規準（基準）の共通認識が図られている。	-0.03	0.02	<b>0.86</b>	0.73
3 教科（科目）内で、評価方法や評価規準（基準）を共有している。	0.04	-0.01	<b>0.79</b>	0.64
削除項目 8 ループリック等（学習到達度を示す評価基準等）を、パフォーマンス課題以外にも活用している。				
因子間相関				
	I	II	III	
II	0.45			
III	0.09	0.00		

に、本研究と直接関連が低い質問9を除く9項目について最尤法による因子分析を試みた。その結果、3因子構造を採用した。そして最尤法・バリマックス回転による因子分析を行った結果、3因子9項目が採用された。第Ⅰ因子は、「ループリック等（学習到達度を示す評価基準等）を活用した評価法を取り入れている」「ループリック等の活用を通して授業改善に取り組んでいる」等の項目で構成されていた。これらの項目は、ループリック等の評価法を意図的に作成・活用し、生徒のアウトプット活動を評価する内容であったため、第Ⅰ因子を「評価法の作成・活用」と命名した。第Ⅱ因子は「日頃から、ALの視点をもって授業改善に取り組んでいる」「ループリック等を活用したり、パフォーマンス課題を取り入れたりすることで、生徒が主体的に学ぶようになると思う」等の項目で構成されていた。これらの項目は、生徒の「主体的・対話的で深い学び」の視点のある授業改善の内容であったため、第Ⅱ因子を「授業改善の取組」と命名した。第Ⅲ因子は、「教科（科目）内で、評価方法や評価規準（基準）の共通認識が図られている」「教科（科目）内で、評価方法や評価規準（基準）を共有している」の項目で構成されていた。これらの項目は、教科部会による指導観の共有・情報共有の内容であったため、第Ⅲ因子を「教科部会の取組」と命名した。

また、教師アンケートによる実施効果を検討するため、各下位尺度を構成している項目の得点の加算平均から下位尺度得点を算出した。そして下位尺度ごとに、時期による1要因の分散分析を行った。その結果、「評価法の作成・活用」では有意な差は見られなかった。「授業改善の取組」では有意な差が見られた。下位検定の結果、令和5年6月と令和5年11月の方が、令和4年12月より得点が高かった。「教科部会の取組」では有意な差は見られなかった。「評価法の作成・活用」において、ループリック等を生かした評価法の作成・活用に

表 6 教師アンケート分散分析結果

		時期			時期の主効果 F 値
		R4 12月	R5 6月	R5 11月	
評価法の作成・活用	M	2.78	3.00	2.95	2.49 n.s.
	SD	0.78	0.49	0.50	
授業改善の取組	M	2.84	3.11	3.06	6.99 **
	SD	0.54	0.40	0.41	
教科部会の取組	M	3.15	3.19	3.15	0.15 n.s.
	SD	0.65	0.67	0.74	

(n=31) \*\*p&lt;.01 \*p&lt;.05

については、さらに組織的・計画的に取り組む必要がある。石井（2015）は、生徒の資質・能力育成に向けて研修の機会の充実を図りながら長期的に継続的に評価システムを構築し、学びの節目でパフォーマンス課題に取り組む必要性を述べている。また「本物の学力を真に形成するためにも、授業改革は、評価の問い直しにまで至らなければならない」とも指摘している。今後さらに探究的な学びが求められる中、教科等横断的な視点のあるパフォーマンス課題と評価法を教育課程に意図的・計画的に位置付けていくことが必要である。

「授業改善の取組」においては、授業力向上の大きな要因の一つである授業改善が組織的・計画的に実施されたことが明らかになった。生徒が各単元で身に付けた知識・技能を活用・発揮するパフォーマンス課題の実践が授業改善を大きく推進させたと考えられる。

「教科部会の取組」については、公開授業週間の取組が、同僚性の涵養につながったと考えられる。今後さらなる組織的な授業力向上に向けて、教材・授業開発という営みが個々の教師に委ねられるのではなく、教科部会を中心に指導計画や指導法、評価等の見つけ直しがなされ、持続的な「学びあい高めあう」組織文化の構築が必要である。

## 7 全体考察

1 年次・2 年次ともに英語科の実践を通して、パフォーマンス課題とルーブリック等の評価法を生かした授業実践が英語科教師の授業改善につながったと考えられる。生徒においてもパフォーマンス課題とルーブリック等の評価法が一体となった授業が、生徒の深い学びにつながったといえる。また、研究者を含めた定期的な教科部会を通して、英語科教師間で非常に協働的な関係が醸成され、対話を重ねながら生徒のどのような学びの姿を目指すのか等、指導の方向性が重なりあっていく過程は大変意義のあるものであった。

公開授業週間では、全教職員で働き方改革の視点を共有し、持続可能な授業改善の取組を組織的・

計画的に実現することができた。また、ルーブリックや学習教材等の共有・共用化も図ることができ非常に価値のある取組になった。

山崎（2023）は、教師は日常の実践を遂行しながら自らの発達と力量形成を「単調右肩上がり積上型」に自己形成していくものではなく、質的な変化・転換を伴った複雑なもので、一人一人が背景としてもっているさまざまな要因が複雑に織り合いながら主体的な選択により発達していくものであると指摘している。今後はさらに教務部・研修部・教科部会が中心となり組織的・計画的に情報共有や実践共有を図りながら、教師一人一人の資質・能力をキャリアステージごとに育成していく仕組みを創らなければならない。

## 8 成果と課題

### 【成果】

- パフォーマンス課題の実践共有、ルーブリックや学習教材等の共有・共用化を図ることで、さらなる教育活動の充実につなげることができた。
- 全教職員で働き方改革の視点を共有し、組織的・計画的に持続可能な授業改善の取組を構築することができた。

### 【課題】

- 教科等横断的視点のあるパフォーマンス課題と評価法の教育課程への位置付けが必要である。
- キャリアステージに基づいた教師の資質・能力育成のための仕組みづくりが求められている。

## 主な引用・参考文献

- 石井英真 2015『今求められる学力と学びとはーコンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影ー』日本標準 65-74
- 石井英真 2023『中学校・高等学校 授業が変わる学習評価深化論』図書文化 13, 67-69
- 今井理恵・松沢伸二 2015「自律を育てる英語指導モデルー意欲を引き出すパフォーマンス課題を用いてー」全国英語教育学会紀要
- 西岡加名恵・田中耕治 2009『「活用する力」を育てる授業と評価 パフォーマンス課題とルーブリックの提案』学事出版 8-21
- 西岡加名恵他 2022『新しい教育評価入門』有斐閣コンパクト 10
- ベネッセ教育総合研究所 2021「VIEW next 高校版 特集 はじめの一手で見えてくる生徒のための学習評価」21

## 謝辞

本研究に際し、研修機会を与えていただき、御支援いただいた福岡県教育委員会に心より感謝申し上げます。また、在籍校の校長先生をはじめ、関係の諸先生方に多大なる御協力をいただきましたことを深く感謝申し上げます、謝辞といたします。